

❖ 第一章 時事・世相

1	「セウォル号」沈没から思うこと	4
2	教育事情と大学生	9
3	消えた「姦通罪」	17
4	直面する高齢化社会	23
5	徴兵制と若者たち	30
6	日本企業が韓国人学生に熱い視線	42
7	「未来ライフ大学」と韓国梨花女子大生の座り込みデモ	48
8	金英蘭法とは？	57
9	カンガル―族	64
10	韓国の専業主夫	72
11	梨花女子大学総長退陣要求運動から思うこと	79
12	第二次中東ブーム？	88
13	生年月日修正申告増現象	95

❖ 第二章 食文化

- 1 キムチとキムジャン文化……………104
- 2 冬至とあずき粥……………112
- 3 お正月 そしてお雑煮……………118
- 4 暑気払い……………126
- 5 チゲ鍋?……………133
- 6 えごまをご存じですか……………140
- 7 包み食文化……………146
- 8 「秋夕」について……………154

❖ 第三章 生活・慣習

- 1 お墓事情あれこれ……………164
- 2 二〇一四年九月、結婚式場は閑古鳥?……………170
- 3 韓国の正月は新暦?……………176
- 4 「先生の日」から思うこと……………181

5	七夕は旧暦で	187
6	旧暦（太陰太陽暦）と韓国人	193
7	パンソリを聞いたことがありますか	201
8	韓国の姓名について	208
9	名節離婚	220
10	流行語から見える韓国	227
11	「コングリッシユ」について	237
12	韓国の小学生がなりたいたいもの——日本と比較すると	248
13	「先生様」と「さようなら」	257

第
一
章

時
事
·
世
相

1 「セウオル号」沈没から思うこと

二〇一四年四月十六日、仁川インチョンから済州島チェジュへ向かっていた旅客船「セウオル号（세울호）」が全羅南道珍島郡（진남도 진도군）の觀梅島沖海上で転覆、沈没という、韓国にとつて痛恨の大惨事が起きました。この船には修学旅行中の高校生三二五人と引率教員一四人、一般客一〇八人、乗務員二九人、合計四七六人が乗船していました。

来日して二〇年余が過ぎた私にとって、韓国からのニュースでこれほど大きな惨事は記憶にないほどでした。

日本では韓国人として見られる私ですが、時たま帰国すると、周囲からは日本人とは思われないにしても、異質な韓国人と見られるようになっていて、私のなかにも「日本に帰

る」という意識があるのは否めません。好むと好まざるとにかかわらず、日本の水に馴染んでしまっている私に、凶らずも二方向から今回の惨事を見させることになりました。

一つは、惨事そのものを知ろうとする韓国人の目。もう一つは、惨事に対する同胞たちの反応、対応を滞日韓国人として見る目でした。

第一報が入ったとき、潮の流れが複雑な海域で知られていただけに、私は潮流にやられたと思いました。ところがそのすぐあとに、セウォル号が元は日本のフェリーだったとの情報が流れ始めました。あたかも日本での建造船で、中古だったから転覆したと言わんばかりの報道に私は違和感を覚えずにいられませんでした。人命救助に全力を注がなければいけないときに、なぜ韓国ではこんなことが大々的に取り上げられるのか、私には理解できなかつたのです。原因究明もまだ行われていない段階でのこうした報道に、自制を促す良識ある意見が韓国内でもあったと信じたのですが……。ただその後、日本では耐用年数上から廃船となるような船を韓国ではさらに改造して使い続けていたことから、安全性の観点で大きな問題となっていきました。

一方、日本政府はすぐさま支援体制を決め、それを韓国側に伝えていました。残念なが

ら韓国政府は日本側の申し出を断ってしまいました。

なぜこうも韓国は物事をいともあっさり決めつけてしまうのでしょうか。いくら韓日関係が政治的にぎくしゃくしているからといって、こうした反応は韓日の民間レベルの交流さえ、いつそう冷え込ませてしまうのには、と思わずにいられませんでした。

そして時をおかずに、セウォル号の船長が一般乗船客に混じって真つ先に救助されていたとのニュースが伝えられました。これほどみごとに「責任放棄」はないとあきれて言葉を失うほどでした。日本の知人のなかには、私にこの船長の行為に激しい怒りをぶつけた人もいたほどでした。日本では海難事故に直面した際、船長の下船はいちばん最後という小学生でも知っている常識が守られなかったセウォル号船長の行為に我慢ならなかったのだろうと思います。

おそらく私の知人だけでなく「韓国人は何を考えているのか」と思った日本人はきっと多かったと思います。もちろんこの船長が韓国人のすべてではありませんが、私が情けない気持ちに陥ったことは確かでした。

さらには、セウォル号運行会社の実質的オーナーの雲隠れが韓国内で「無責任」と批判

され、出頭要請が出たのは当然のことでした。

韓国の生活レベルが向上し、世界をリードする観のあるIT産業界の発展は、韓国人である私にも嬉しいものですが、今回の事故で明らかになったのは経済効率優先のあまり、安全性への配慮が驚くほど軽視されてきたことでした。

一方、日本ではバスに乗車すると「バスが停車するまで座席を立たないでください」という車内アナウンスが流れます。お年寄りや身体の不自由な人たちへの配慮からです。また電車では車椅子の方や盲導犬を伴った目の不自由な方が乗車しているのをよく見かけます。こうした肉体的ハンデを持つ人びとが安心して外出し、乗り物を安全に利用できる社会が日本には定着し始め、誰もがそれを当然のように受け入れています。

韓国社会の仕組みにもっと安全性への配慮や規則の遵守じゆんしゆが浸透し、徹底していれば、今回のような惨事は避けられたのではないのでしょうか。

韓国はこれまで日本を目標にし、日本に追いつき、追い越せとばかりにがむしやらに（と私には映るのですが）国を作ってきました。でも今回の事故で、何をしなければならぬのか、その解答が示されたと私は思っています。

二〇一四年七月十四日現在、未だ一一名の乗船客が不明のままです。そしてこの事実から韓国（人）は目をそむけてはならないのです。

（二〇一七年三月二十三日、事故から一〇七三日目に船体が引き揚げられました。しかし依然として九名が行方不明です）。

2 教育事情と大学生

日本の学校では桜が咲く時期がおおむね入学シーズンですし、新学期のスタートになります。でも韓国では、三月にすでに新学年が始まっていて、日本より学年暦がほぼ一カ月早いと言えます。そのため韓国の大学はたいいてい六月下旬で一学期の授業が終わり、夏休みに入ります。

ところで韓国では、四年制の「大学」は「大学」とは呼びません。「大学校(대학교)」と言います。「大学(대학)」という言い方もありますが、意味が違って、大学の学部、あるいは二年制の大学、つまり日本的には短期大学や専門学校を指すこととなります。したがって「○○大学校経営大学」は、日本の「○○大学経営学部」の意味となります。です

ので、名刺などに「学長」とあれば、その方は「学部長」ということになります。それでは日本で言う「学長」は？ 一般的には「総長」と呼ばれます。

韓国の大学生は言うに及ばず、小学生から高校生までもよく勉強すると言われています。その大きな理由の一つは、非常に激しい競争社会になっているからです。実は私自身、日本へ来た理由の一つに、この激しい競争社会が嫌になったということもありました。

なぜ激しい競争社会になるのでしょうか。

それは日本では考えられないほどの極端な学歴社会になっているからです。韓国人の多くが競争を勝ち抜いて、然るべき社会的地位を手にする少数の選ばれた韓国人になりたい、ならないという異常なほどの切迫した思いを抱いています。そのため他人に負けまいとする競争意識が強くなるのでしよう。

ですから、最近ではこうした詰め込み授業（かつて日本でもよく言われていた言葉のようですが）の弊害を危惧し、もっとのびのびと学生生活を送らせたいと、子どもを海外へ留学させる親も増えてきています。

困ったことに、こうした社会のあり方が韓国社会の隅々にまで浸透していて、子どもは

生まれたときから、学歴社会、競争社会の荒波に投げ込まれてしまいます。

一般的に大学受験を目指す高校生は、授業が終わってからも、さらに学校で夜の九〜十時頃まで自習し、そのほか塾に通う生徒も珍しくありません。

受験生の間では「SKY」とか「イン・ソウル」という言葉がささやかれます。「SKY」とはソウル大学、高麗大学、延世大学を指していて、伝統あるトップクラスの大学です。また「イン・ソウル」とはソウル市内にある大学を意味しています。

一般的に大学ランクは国立、私立に関係なくソウルを中心とする首都圏の大学が上位と見られ、地方大学は軽視されがちです。首都圏の有名大学がトップで、次いで首都圏の中堅大学、そして地方の有名大学、地方の新興大学という順になっています。

ソウル周辺の大学に入学を果たさなければ、競争社会での勝者になる可能性は大きく後退してしまいます。ですから、韓国の高校生は寝る間も惜しんで勉強し、ストレスにも耐えて、学校へ、塾へ、そして家庭教師について勉強することになります。

韓国では、成績評価は相対評価が一般的で、日本のように絶対評価や、緩やかな相対評価を採用しようとする動きはほとんどありません（なお二〇一七年五月に就任した文在寅

〔문재인〕 第一九代大統領は、高等学校と大学に絶対評価導入の意向を示しています。

したがって、おのずと競争意識が高まってしまいうわけで、「学校の休暇入りが塾の開講日」と言われるのが現実です。受験生たちには学校は試験を受けに行く所、塾は勉強する所になってしまっているのです。

こうしてやっとの思いで目指す大学に入学したのですから、あとは楽勝かというところ、うはいかないのが韓国の大学生たちです。大学に入学するや、授業科目の履修で早くも受講承認を巡っての競争が始まります。インターネットからの申し込みが可能になっている大学が多く、人気授業は受付からすぐに定員に達してしまいうからです。

もう一つ、日本の大学生と大きく異なるのは成績が相対評価のため、目指す一流の会社に就職するためには大学の授業をおろそかにできなくなります。日本の学生の多くが大学入学後は何らかのアルバイトをしますが、韓国の学生はアルバイトより学生の身分といえる勉強に取り組み、他の学生より少しでも成績を上位にしなければなりません。放課後、図書館が学生で溢れるのはごく日常的光景で、これも日本の大学とは違います。

また親たちも子どもがアルバイトをするのを好みません。何よりも勉強第一と考え、十

分に教育を受けさせるのが親の役目と考えているからです。親がこのようですから、子どもはおのずと親の期待を裏切ってはならないと考えがちになります。

そのため、かりにアルバイトをする場合、親には知られないようにする学生が多く、唯一、親に内緒にしないでできるアルバイトは家庭教師ぐらいでしょうか。

数年前の話になりますが、私の甥がソウル大学院在学中に家庭教師のアルバイトをしていたことがあります。担当した教科は一教科だけでしたが、週二回四時間で一カ月の家庭教師代が五〇万ウォン（日本円で約五万円ほど）でした。当時の大手企業の新入社員の月収が二〇〇〜二五〇万ウォン（日本円で約二〇〜二五万円ほど）でしたから、かなり高額の講師料と言えます。もともとこの金額も在籍している大学によって差があり、甥の講師料は高額だったようです。ちなみに当時のコンビニや飲食店などでのアルバイトは、時給が日本円でせいぜい四〇〇円程度でした。

借金をしてでも子どもの教育費を工面しようとする親心が、かえってあだとなる場合もあるようです。十〜二十四歳の自殺率が韓国では二〇〇〇年に一〇万人中、六・四人、それが二〇一一年には九・四人に増えている、一〇年間で四七％も上昇しています（OEC

D〔経済協力開発機構〕統計資料による)。自殺の原因すべてが教育環境だとは言いきれませんが、十代の子どもたちにとって成績、進学、家庭問題、競争的な教育環境によるストレスが大きく関わっているのは間違いないでしょう。

このように見てくると、韓国の学生は宿願の大学入学を果たしても、超学歴社会、超就職難などが重くのしかかってくるため、日本の大学生に比べて将来への展望という点ではずっと厳しいと言えます。さらに日本と違うのは、十八歳以上の男性には約二年間の兵役義務があるということです（本書三〇頁参照）。

苦勞して大学を卒業しても、すぐさま正規社員として立ち立ちできる人はごく少数です。韓国は大学への進学率ではOECD加盟三五カ国中で一位です。でも大卒者の就職率は最下位です。韓国の一流企業では、英語のほかに第二外国語の日本語か、中国語の習得を採用条件にしているのが一般的です。三星^{サムソン}などでは、英語ではTOEIC八〇〇点以上でない相手にはされないとも言われています。だからこそ必死に勉強しなければならないわけで、日本の学生にはちょっと考えられないのではないのでしょうか。

韓国での就活は日本のように解禁日が定められているわけではなく、二年生あたりから

始める学生もいれば、大学四年生の後期から始める人もいます。たいていは四年生の九月頃に履歴書による書類審査を受けてから面接となりますが、一回で就職が決まることなどめつたになく、就活が何年も続く場合も珍しくありません。

運よく就職できてても正社員として採用される人は限られていて、わずかに二割程度にすぎないと言われています。日本以上に非正規社員が多く存在しています。激しい学歴社会と雇用状況の改善がないかぎり、幼稚園から始まる異常なまでの競争状況を解消することはできないと思います。子どもたちに学校は試験の成績を上げるための場所と認識され、知識の詰め込みや友だちより上位の成績を取ることを良しとする教育は、明らかにゆがんでいると言えるでしょう。

どこかでこうした韓国社会の不正常な連鎖を壊さないかぎり、生徒や学生たちに苦痛やストレスが蓄積するだけで、楽しく学ぶという環境は生まれなれないと思います。

日本に長く暮らす韓国人として、母国のこうした教育環境を強く憂えます。そこで大変、突飛ではありますが、こんな提案を韓国政府にしたいと思います。

☆「SKY」は、今後一〇年間、学生募集を停止。

☆「イン・ソウル」の大学は同じく一〇年間、順番に数校ずつ学生募集を停止ゆがんだ学歴社会を打ち壊す一つのアイデアとしていかなものでしょうか。

あとがき

本書に収めた三十五篇の文章は、すべてメールマガジン『オルタ』に掲載されたものです。市民レベルの手作りメールマガジン『オルタ』の創刊は、二〇〇四年三月二十日でした。「三月二十日」となったのには理由があります。創刊よりちょうど一年前の二〇〇三年三月二十日、アメリカのブッシュ大統領がイラクとの戦争を開始した日に当たっていて、このイラク戦争開始日を忘れないために、という思いが込められていたのです。

このように『オルタ』は、市民一人一人が戦争反対の意思を示し、一人一人が声を上げて平和を創ることを目的として発信が始まったメールマガジンです。

発信開始から二〇一七年で十四年目を迎え、戦争の危機は薄れるどころか、ますます暗

雲がその色を濃くして広がってきているようです。この間、『オルタ』は毎月二十日発信を守り続け、二〇一七年九月号で一六五号となり、今や毎号、世界から三万近いアクセスがあるほどになっています。

この『オルタ』と私との関わりは、代表者の加藤宣幸氏から間接的にでしたが、『オルタ』には、韓国について執筆していただける方がいないので、何か書いてくださいとのことのお誘いを受けたのが最初でした。二〇一四年のことでした。私などに何が書けるのかとても不安で、お誘いを受けてからもしばらくは迷っていました。

そのようなときに、韓国で悲惨な船舶事故が起きました。セウオル号沈没事故でした。私が日本に生活の場を持っていなかったとしたら、この事故について「書く」という衝動に駆られることはなかっただろうと今でも思っています。私にとって『オルタ』掲載の最初の文章となった「『セウオル号』沈没から思うこと」（『オルタ』一二七号、二〇一四年七月二十日）で、私は次のように書いています。

「来日して二十年余が過ぎた私にとって、韓国からのニュースでこれほど大きな惨事は記憶にないほどでした。」

日本では韓国人として見られる私ですが、時たま帰国すると、周囲からは日本人とは思われないにしても、異質な韓国人と見られるようになっていて、私のなかにも『日本に帰る』という意識があるのは否めません。好むと好まざるとにかかわらず、日本の水に馴染んでしまっている私に、凶らずも二方向から今回の惨事を見させることになりました。

一つは、惨事そのものを知ろうとする韓国人の目。もう一つは、惨事に対する同胞たちの反応、対応を滞日韓国人として見る目でした」

この事故に対する同胞たちの動静をリアルタイムで見ているうちに、日本という場で、かなり客観的に韓国国内の反応や対応を見ている自分がいることに驚くと同時に、滞日韓国人として声を上げなければならぬと思うようになりました。どのような声を上げたのかは本文をお読みいただければわかりますので、ここでは省略します。

こうして「セウォル号事故」が私に『オルタ』に韓国について何かを書いてみようと思わせ、結果的に加藤宣幸氏のお誘いにも応じるきっかけとなりました。

言い方を換えれば、韓国について書く私の姿勢を定めてくれたのが「セウォル号事件」だったと言えるでしょう。私が滞日二〇年以上になるからこそ見えてくる韓国が、韓国人

が、韓国文化があることに気がついたのです。

たとえば、「旧暦」での生活があります。韓国という国から外に出ていなければ、あるいはたとえ国外に出ていても海を隔てた隣国で、同じ漢文化圏でなかったならば、韓国の「旧暦」にあらためて眼を向けることはなかっただろうと思います。

また食べ物についても、日本との比較という視点から韓国のそれらを見ますと、これまで私自身が気がつかなかつたり、意識しなかつたことが見えてくるようになりました。

こうして『オルタ』への投稿が五回目となった第一三二号からは、「むくげ権と桜」というコラム欄を加藤宣幸氏が設けてくださいました。言うまでもありませんが、「むくげ権」は韓国の国花ですし、「桜」は日本の国花ではありませんが、国花のように日本の方は大変馴染んでいます（ちなみに日本の国花は「菊」です）。加藤宣幸氏の韓国（人）との友好を深めたという思いと、私への期待が込められているように感じられ、私には大きな励みとなりました。

今回一冊にまとめるにあたり、論創社の編集担当者からアドバイスをいただき、三つの大まかな項目に分類し、それぞれ、ほぼ執筆順に編集してあります。時間の経過に伴い、

やや違和感を覚える記述になっている箇所もありました。そのため編集に際し、一部修正したり、その文章の末尾に一文をつけ加えたものもあります。

また今回の単行本化にあたり、全体の統一をとるために、『オルタ』発表時の文章を部分的に書き直したり、省略したりもしました。多少とも読みやすくなればという思いからです。

現在、韓国と日本の関係は残念ながら良いとは言えません。政治的な問題や課題をいくつも抱え、その解決の糸口どころか、話し合いの場さえ持てない状況に置かれています。

おのずと民間レベルの交流にもその影が伸びてきています。このような両国のぎくしゃくとした関係を少しでも緩和させるために私にできることとなれば、日本人びと、特に若い人びとに韓国という国を理解してもらうことだろうと思っています。

その意味では、『オルタ』に発表の場を与えていただいたことは大変ありがたく、加藤宣幸氏ほか編集者諸氏には感謝の気持ちでいっぱいです。

本書に収めた韓国に関わる文章は、どれもつたない内容ですが、これらを通してほんの少しでも韓国（人）や韓国文化の理解が深まり、日本と韓国の友好的な関係が育まれてい

くお役に立てればと願うばかりです。

最後になりましたが、本書の出版を快諾してくださいました論創社の森下紀夫社長にはお礼の言葉もありません。また編集者の永井佳乃氏にはいろいろお世話になり、森下社長にもご助言をいただきました。お二人に厚くお礼を申し上げます。

二〇一七年十一月三十日

延 恩株

❖ 著者略歴

延 恩 株 (ヨン・ウンジュ)

韓国ソウル特別市生まれ。大妻女子大学准教授。学術博士。主な研究領域は国際文化、環太平洋地域文化、日韓比較文化、韓国語教育。

2003年から桜美林大学、和泉短期大学非常勤講師を経て、2009年から桜美林大学専任講師。2013年から現職。

著書には、『太陽の神と空の神——韓国と日本：神話の世界と古代から』（論創社、2018年）、『速修韓国語 基礎文法編』（論創社、2017年）、『文化研究の新地平——グローバル時代の世界文化』（共著、はる書房、2007年）、『スウェーデンボルグを読み解く』（共著、春風社、2007年）、『韓国単語 韓国語カレンダー』（責任編集、石田総業、2010～2013年）ほかがある。

主要論文には、「儒教の宗教性に関する一考察——韓国と沖縄のシャーマニズムとの関連において」（『アジア文化研究』第10号、2003年）、「韓国のシャーマニズム——史的概観とムードンの成巫過程」（『人体科学』第12巻1号、2003年）、「新羅の日神信仰の一考察——延鳥郎・細鳥女説話を中心に」（『アジア文化研究』第18号、2011年）などがある。

韓 国 近景・遠景

2018年5月12日 初版第一刷印刷

2018年5月16日 初版第一刷発行

著 者 延 恩 株

発 行 者 森下紀夫

発 行 所 論 創 社

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装 幀 宗利淳一

編集・組版 永井佳乃

印刷・製本 中央精版印刷

©Yeon EunJu 2018 Printed in Japan.

ISBN978-4-8460-1666-1

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。